

ラウンドテーブル B会場
--------------

■ テーマ 「新しい文学教育の地平」に向けて ■ 企画代表者 田中 実  
 話題提供者 松崎正治・戸田功・上谷順三郎

■ 企画趣旨

企画代表の田中は、これまで主に須貝千里・馬場重行・佐野正俊各氏をはじめ多くの日本文学協会国語教育部会のメンバー有志と共に、文学研究と国語教育研究の相互乗り入れをベースにして「新しい文学教育の地平」を拓くべく試行錯誤してきた。今回初めてこの全国大学国語教育学会に参加するに当たり、そのラウンドテーブルを企画する機会に恵まれ、全国大会会員の戸田功・上谷順三郎の両氏に討議を依頼し、松崎正治氏に司会をお願いすることになった。戸田氏は現状批判の切っ先の鋭さ、上谷氏は堅実、篤実な学風、松崎氏は研究状況把握の卓抜さ、とそれぞれに敬意を抱いている。今回の発表に際し、前回の大会シンポジウムは参加しなかったので三人の発表者の資料を拝読したが、問題は緊迫していると共にむしろ拡散している印象も受けた。〈読み〉の方法に関しては山元隆春氏が手堅く且つ示唆的、文学教育における制度性に関して小森陽一氏が挑発的で刺激的、足立悦男氏には韓国の状況との対比での知識を得た。今回の企画の趣旨は、教育改革が混迷し、ここ二十年ほどの文学逆風の時代が終りかけている時期、前回の趣旨を受け、「これからの文学教育」の具体的な実践をするための道筋を付けることにある。「新しい文学教育の地平」を拓くことである。そのためには、まず「読書行為」とは何かを問い、学会として基本的な共通認識の場を準備する必要がある、と思う。

■ 概要

当日の概要を述べることは無論出来ない。そこでここでは主催者の要請に応じて、田中のごく個人的な立場と意見を記すしかない。戸田・上谷両氏のご意見、松崎氏の捌きは当日お伺いすることになる。・「言語帝国主義」論に応じる前に

思うに、いま国語教育及び文学教育が抱えている“なぜ今文学教育なのか”の問題は「言語帝国主義」に関する一連の理論に対し、どう応えるかに直面している。ここには、「これからの文学教育」の動向を決定するアクチュアルな要諦の一つがある。だが、そうした問題に向かうためにもその基底にある文学教材の「読書行為」をどう捉えるか、その主体と客体との相関がそもそもいかなる関係にあるのかから「読むことの謎」に向かって話を進めたい。

・「読書行為」論の急所へ

(1) 難問の別決

既に国語教育界でも「読書行為」論の重要性は言われていた。例えば『読み手を育てる—読者論から読書行為論へ』（1993 明治図書）の著者田近洵一氏は、社会文学会 1997 年大会の分科会で、さらに「文学と教育との関係を解く鍵は、読むという行為にある。読み方技術にしても言語表現にしても、その習得は、文学の〈読み〉の成立を抜きにしてはあり得ない。」と端的に断定、こうした田近氏の問題把握の確かさを評価したい。その上で筆者が問題にしてきたことはその「文学の〈読み〉の成立」過程に難問が隠れていることの別扱作業である。それを図らずも教えてくれたのは氏との座談会（司会須貝千里氏）「読みのアナーキーをどう超えるか—〈原文〉とは何か—」（『文学の力×教材の力 理論編』2001 教育出版）の席だった。以前から『羅生門』や『走れメロス』など、氏との小説の解釈や評価の違いが気にならないではなかったが、語りの基本概念が違っていただけではない、読書行為の考え方自体が異なっており、争点は教材〈本文〉を読み返して、“「作品に戻る」のか”、“「返れない」のか”であった。対立は今も続いているが、そもそもこれは 1988 年に渋谷孝氏が『文学教育論批判』（明治図書）で、「文学は在るのか、読み手の心のなかにあるのか」と既に提起した問題であった。だが批判を受けた文学教育界ではこの提起をどういうわけか等閑に付してきた。氏は 2003 年、『文学教育の新しい教材の教え方』で、再び「文学作品は客観的に存在するのか、読み手の意識の中にあるのか」と問う。読書行為論は渋谷氏の問い掛けを避けて通る事は出来ず、言わばこれは〈読みの原理〉を解く事である。（2）「還元不可能な複数性」というアナーキー

研究史を見れば、〈読み〉が作品を拠点にしてそこに「返る」のは不可能、私にとってこれは自明の理、既に決着の付いていた問題である。今更とりあげるには及ばない。だが、文学研究・文学教育の双方とも今なお〈読みの原理〉に混迷を抱え、むしろその核心が隠れてしまっているのではないかと思う。ロラン・バルトは書かれたもの（「エクリチュール」）に着目し、それまでは主観の捉える対象であった「作品」という実体領域を読み手の現象と「単なる物質の断片」とに二分してみせ、後者を無機質な世界と捉え、〈読み〉は「元の文章」に「還元不可能な複数性」となって実体性が排除されるアナーキーな行為と判定した。バルトはこれを「テキスト」と名付ける。そこで研究状況はそれまでの作品論からテキスト論の時代へと転換し、今日のカルチュアル・スタディーズ、ポストコロニアルが隆盛したが、そもそも「神なき日本の風土」において問題の「極点」にある「還元不可能な複数性」という概念は極めて観念しにくかったのである。捉えた対象作品を問うことと誤読したからである。そうではなく、捉えた対象の、その向こうが問われていたのである。

捉えた対象とは〈わたしのなかの他者〉のこと、その境界領域の向こうを問うとは信仰に関わる神の実在か、非在（虚無）かを突き付ける場であり、そこをバルトは「単なる物質の断片」の広がるアナーキーとして「作者」を殺したのである。信仰の秘儀に関わる。まさしく近代小説の誕生とは捉えた対象とその向こうとの相関、〈わたしの中の他者〉と了解不能の《他者》の相関を領土とすることの発見に関わり、私見では近代小説とは本来的に主体の領域を越境する他者の問題、自由と自我、宗教や哲学の問題を内包していたのである。

### （3）文学の根拠

国語科には算数や数学という教科のように正解が「ある」のか、それとも「ない」のかとはこれまでもしばしば言われたことだった。文学教材の文章の解釈にはそもそも正解が「ある」のか、「ない」のかの問いである。先の二分化の結果、〈読み〉が「還元不可能な複数性」であるかぎり、正解は単に多義的とか十人十色とかのレベルではなく、そもそも正解は存在しない。「作品に戻る」という見方は大雑把な認識でしかなかっただけでなく、原理的に〈正しい読み〉が成立せず、そうした文学（教育）研究自体が成立しなかったのである。いや、そればかりではない。そうであれば、文学現象そのものに根拠がなかったことになる。ところが他方、人類の歴史は文学もまた時空を超えて生きてきたことを教えている。ならば、〈文学〉に根拠がなく、〈読み〉は恣意と誤読の繰り返しのアナーキーなものと言えは済む問題ではない。

筆者の結論はこうである。〈読み〉は確かに実体ではない。主体にも客体にも、その相関にも文学の根拠は実体としては断じてない。根拠は主体と客体の間、第三項（〈原文〉）にあり、それが実体ではなく、実体性として読み手の中の〈本文〉に内在しているのである。これが読み手の内部に葛藤をもたらし、既存の価値観・世界観を揺さぶり、読み手を瓦解、倒壊させ、そこにこそ文学の力が働く。対象作品を捉えることがそれを捉えた自己を捉えることに反転し、この行為の継続によって〈読み〉の深みに誘われ、文学という現象に拉致されるのである。つまり、〈読み〉とは〈本文〉に読み手自身が撃たれ、拉致される行為であり、それは正しさを問うのでなく、読み手の価値を問うものであったのである。（4）読みの公共性問題はいかにして可能か？

そうであれば、〈読み〉は倫理や公共性の問題として拓かれる必要がある。読書行為とは表現することと同様それ自体では「自己振幅の幅」（原口統三の『二十歳のエチュード』）に止まり、これを超えることは出来ない。全て自己弁護になり、虚偽となる。これを対象

化するためにはロラン・バルトの「還元不可能に複数性」を一旦くぐり抜け、これを対象化し、読む主体を絶対性の前で瓦解させていく必要がある。すなわち〈読み〉は「自己振幅の幅」の限界線を超えようとして、自己倒壊を挑み、虚偽を超えようとするのである。そこには〈読みの倫理〉が働いている。〈読みの倫理〉は実存とアクチュアルな公共性の問題を呼び起こす。ここにあるべき〈読みの理想〉があると筆者は考えている。

・具体的な〈読みの方法〉

原理的で抽象的な領域にとどまらず、具体的に作品の〈読み〉を示し、読みを根底で支えている読み方の制度を検討し、具体的に示す必要がある。

現在必ずしも「視点」と「語り」の領域が峻別されていない。以前田近氏と魯迅の『故郷』を論じた際、「〈語り手を超えるもの〉」は不要ではないか、との疑問を受けたので、直ぐに「〈語り〉の領域—魯迅の『故郷』の読みを例にして—」（『月刊国語教育研究』2003・1）でこれにお応えしたが、作中人物が作品内で実際に語る一人称の「語り」は旧作品論にもあり、ここで言う「語り」は読み手による「現象としての語り（手）」の領域を問題としている。作品内の生身の〈語り手〉に対して、名称はともかくこの「〈語り手を超えるもの〉」を読まなければ、実体の〈語り手〉の視点人物だけに限定され、語り論は始まらない。当日は余裕があれば、具体的な有名教材でこれを説明したい。